

<青少年問題協議会>

～各委員自己紹介～

小林課長：それでは定刻になりましたので、これより令和5年度第1回青少年問題協議会を開催します。

それでは、初めての方もいるため、加藤先生の方から改めて自己紹介をお願いします。

～委員自己紹介～

加藤会長：それでは、宜しくお願ひ致します。本日、次回から新しく市民委員として参加する山田氏に傍聴で来ていただいているので、自己紹介をお願いします。

～山田氏 自己紹介～

加藤会長：それでは、始めていききたいと思う。まずは、議事に入る前に、資料等について事務局の方からご説明いただきたい。

～事務局説明～

加藤会長：それではいろいろご意見いただければと思う。それでは、議題1の、「子ども若者育成プランの令和4年度推進状況」について、これを説明いただいてから、議論していく。

～事務局説明～

岩木委員：多岐にわたりすぎて質問のしようがないと思う。テーマを絞っていかなくてはいけない。

下山委員：ちょっと、ずれる質問だが、青少年事業のところで2,332,100円という金額が出ているが、青少年指導員は補助金を470,000円しか貰ってない。青少年協会の方にお金がかかっているということだろうか。キャンプも入れての事だろうか。

加藤会長：5-2だろうか。

下山委員：4-1。

小林課長：この金額のところだが、青少年課の育成事業の予算決算額が書いてあるので、これが全部青少年協会であるとか、青少年指導員の予算であるとかそういう事ではなくて、「育成事業」の全体の予算枠ということで記載している。

下山委員：育成の予算枠ですね。

小林課長：はい。

下山委員：育成の決算額ということであっているか。

小林課長：はい、青少年課の方で事業4つあるが、その内の1つが「育成事業」という事業で、その育成事業の中で、この青少年問題協議会や、青少年指導員さんの事業、青少年協会さんの事業などがあり、それらすべての「育成事業」全体の決算額を書いたもの。説明が足りなくて申し訳ない。

加藤会長：資料3で言うと、目標が1,2,3,4,5とある。例えば目標1だと、「共生社会の一員となる豊かな人間性を育てよう」ということで、主な施策として自然と触れ合うとか体験とか他人の思いやりなどがあつた。目標2は「人と人との繋がりの中で社会の担い手となるための社会性を・・・」ということで、施策としては地域との連携とか多世代の交流や情報提供など。生きる力が社会の繋がりを育む、民間企業との連携。3は、鎌倉自然・歴史・文化。4は「大人も成長しよう」ということ。5番が「気軽に相談しよう」「支援を受けられるような安全進行するようにしましょう」「街にしましょう」、ということで目標立ててやってきたわけである。これらの中でどの辺が課題なのか、もしくはよくできたことなど、市として何か意見はあるか。

小林課長：分かりづらくて申し訳ない。「共生社会の一員となる、豊かな人間性を育てよう」ところでいうと、自然と触れ合う機会を提供したりであるとか、多様性の理解、差別のない共生社会の普及啓発みたいなものが事業になっているが、課題として挙げられるのは、若い方へよりリーチが届いているかどうか。その「豊かな人間性を育てよう」というところで、例えば、作文の応募の件数が少ないことや、周知啓発が本当に若い方にちゃんと届いているのかというところが、少し見えにくい。これらのことを各課

の現状課題というところで挙げられているというふうに考えている。

加藤会長：1-5 のところで、「小中学生からの意見を取り入れていく方法を検討中」、もう少し子ども達の意見を聞きながら、どういうふうに育ったらいいかということ、来年度に向けての課題として挙がっている。ですから目標1は、「共生社会の一員」として、子ども達がいろんな活動をされたわけだが、その中で子ども達側も生きやすくしていきたいなど、課題が出たと思う。

林 委員：今、青少年課の所管事業のところをピックアップして説明されたが、青少年課の事業以外のところも、全体を通した意見を言ってもいいのでしょうか。

加藤会長：いいと思う。

加藤委員：目標2の「人と人とのつながりの中で、社会に担い手となるために社会性と主体性を育てよう」というところでは、課題等を感じられる部分はあるだろうか。

2-7の「自殺」に対する理解ということの中で、「いのちの教室」などいろいろやってきた中で、課題として、子どもや若者が自分で行動できるようにするためにも、教育部と連携していくことが必要なのではないかということ、を課題として挙げている。学校側はどうだろうか。中学校や小学校は「いのちの授業」は実施しているのだろうか。

河合委員：市の小中学校の校長会では、このような教室があるという周知を市の職員が行ってくれている。その話を受けて、申し込みをしてから実施するというかたち。ただ鎌倉市の物とは別に、神奈川県にも「いのちの授業」という力を入れてやっているのもあるので、すべてが鎌倉市のものを使っているわけではないと思う。

加藤会長：「いのちの教室」を実践をされたのは、市立の小学校が5校・中学校が9校・私立高校が1校とある。だが、担当課が教育部との連携が必要と感じているとあるので、この辺は、学校側はどのような課題感をお持ちだろうか。

河合委員：わが校も先日実施したのですが、すごくいい内容で、保護者の方も参加可能であった。今の中学生に対してそういう話をするのは、親としては難しいところだったが、それを市の方がよく話してくれたというふうに、喜んでいる方がいた。

加藤会長：実践している学校には市の職員が行っていて、しかも保護者も来ていると。これはとてもいいこと。2-9には事業の名称や内容について見直しを行う可能性があるということが書いてあるがこれはよろしいだろうか。

では目標3のところはどうだろうか。3-8は文化財課のところ、「展示や行事等への子ども・若者の参加者が少ない。郷土芸能保存団体の後援者が不足している。」とある。子ども若者の参加者が少ないということが文化財のところでも課題としてある。他にも気づいたことなどあればどうぞ。

若木委員：質問だが「参加者が少ない・不足している」というコメントは青少年課が書いたものか。それとも主管課の文化課が書かれたものか。

加藤会長：先ほどの説明では、これらは主管課からの回答であるとのこと。

岩木委員：そうすると、「子ども若者の参加者の少ないからどうしたらよいか」という思案をここで協議すればよいだろうか。

小林課長：もしそれに向けてのご意見がありましたら、それも頂戴できたらと思う。

加藤会長：目標4はどうだろうか。先に進んでよいだろうか。

目標5のところは、5-4と5-8のところ、課題がいくつか上がっていたと思う。

若木委員：例えば、目標5の「安心安全に暮らせるまちにしよう」という部分があるが、このアンケートっていうのは、すべて鎌倉市の主管課のアンケートだ。

例えば、警察方の意見はどうだろうか。成人の年齢が18歳に引き下がってきて、どういう様な指導をされて、どういうような問題があるのかというような視点も、入ってきてもいいのではないだろうか。せっかく警察の方がいるのだから、いろんな世代に目を向けた方がいいと思う。

加藤会長：警察の方はどうだろうか。安全性などの面では、特に青少年の問題だとかは今年1年でどのようになっているだろうか。

園田委員：鎌倉警察署管内についてお話させて頂く。少年事件に関しては、確かにある事はあるが、件数としてはそんな多くはない。鎌倉の子達、他市の子達、一概にはいえないが、やはり問題になっているのは「大麻」。全体的に増えてきている。それは鎌倉市だけではない。あとは「闇バイト」。現在、全国的に一番問題になっているところ。ただこれが、すべて鎌倉に当てはまるかというと、そうではない。私の個人的な意見になるが、比較的、鎌倉の子たちはこれらの問題が少ない方ではあると感じている。

加藤会長：「闇バイト」だとは。「大麻」これらに巻き込まれたら大変だと思う。

目標1から目標5までについて話してきたが、何か意見等はあるだろうか。

先ほど報告を聞いて、私が感じたのは、中学生高校生のサポーターの参加率が悪い。やはり中学生や高校生の居場所をもっと増やし、中高生が活動できるような場所が、今鎌倉では必要なのではないかとこのように提起されたような気がした。全体としてはこの辺が一つポイントだというふうに考えた。

他にはなにかあるだろうか。

林 委員：校長先生も参加されているため、学校の現状・高校の現状を聞いてみたいと思う。かまくらっ子のプログラムでは少し関りがある。中高生も参加されているが、現状に関してはどうなのかを伺いたい。

加藤会長：中学校高校ではどんな問題とか、或いはいいことも含めて、鎌倉の特徴みたいなことはあるのだろうか。

河合委員：全国的な傾向だと思うが、鎌倉市も含めて不登校生徒は増加傾向にある。コロナの時期を過ぎたあとはどう推移していくかわからないが、昨年度までの児童生徒の不登校の数は増えている。

加藤会長：鎌倉市でも増えていると。高校はどうだろうか。

田中委員：高校もやはり不登校の生徒が増加傾向になるのかなと思っている。何よりも昨年度、「自殺」してしまう高校生の数が例年度より多く、県の方から夏休み前・夏休み後に1人1人個別面談して、クラス管理するよう指示が出た。

加藤会長：それは知らなかった。

田中委員：自殺に繋がってしまうような問題を抱えた高校生がいる現状。理由がわかりづらい、遺書も何も残さずに突然自殺をしてしまうというようなケースが多く、どうしてそうなってしまうのかというところがなかなか掴みきれないという様な問題がある。本校の生徒は、どちらかというとおとなしくて、先生の話もよく聞く生徒が多いのだが、逆に言うと自分の心の中の表現の仕方があまり上手でない、自分の想いを周りに上手に伝えられないっていうような悩みを抱える生徒は非常に多く、また、発達的な障害を持つ生徒も、最近では増えてきているというところもあるので、今年から高校の方ではスクールカウンセリングとソーシャルワーカーが全校配置して、週に一回来てくれる事になっている。本校の場合は毎週金曜日にスクールカウンセラーとソーシャルワーカーが勤務して下さっている。ソーシャルワーカーの方では、場合によっては児相にも報告・相談しつつという状況。

加藤会長：中高生の方はいろいろ厳しい状況だが、川島さんどうだろうか。養護施設の今の傾向は。

川島委員：不登校状態でそこから児童相談所が勧誘して、親子分離して、何年も学校に行っていないお子さんが、うちの施設に来るという事もある。その後、登校できるお子さんもいるが、なかなか同じ学年の授業についていけないという子もいる。中学校でも不登校のお子さんもあるし、高校でもでも授業についていけなくて、今の学校になかなか行けないというお子さんはいる。教育をその子どもに保障していくかというところで、学校以外でもいろんな学びの場や選択肢があるといいなと、思っている。

加藤会長：幅さんはどうだろうか。何か聞かれて感じていることはあるか。

幅 委員：私の長男も少々発達障害を抱えている。もう成人しているが、今現在も結構悩んだりすることが多い。今、大学には相談室がありカウンセラーいるので、その先生に相談したり、病院で相談したりしても、結局悩みが解決できない。結局、今一番力になっていただいている、市の福祉課で紹介していただいた相談員。その相談員の方が親身になって相談に乗っていただいている、その方に話すことが一番、心

のよりどころになっている状態である。

この前、学校評議員として岩瀬中学校の体育祭に三年ぶりに行かせていただいた。中学1年生から3年生までの3年間ずっとコロナだった子どもたちの体育祭だったのだが、驚いたのはマスクを外していない

体育祭なのにも関わらず、3分の1以上の子どもたちがマスクをしながら走っていた。中1～中3までお互いの顔を知らない、マスクを外すことがまず恥ずかしいということ。修学旅行もなく、さまざまなことが私達と全然違う状況、いびつな3年間を過ごした子たちのその体育祭に衝撃を受けた。校長先生のいろいろお話を伺うと、やはり不登校の子が凄く増えているという。何もかも我慢させられていたので、それもありきで自分の中に籠る子が非常に多く、家族の中でも一緒にご飯食べる事もしなかったりとか、SNSに走ってしまい、その中でいじめにあったり、全てが携帯一つの世界に籠ってしまう。その辺のいびつさで、先生方も非常に困っているという風にお話を伺ったが、色々な意味でコロナ禍は子ども達を壊してしまったのかなと感じた。

加藤会長：コロナの影響は相当大きいと思う。石井さんはどうだろうか。

石井委員：「不登校」って事に関してだと、やはり鎌倉市も多いのだと思う。私は横浜の方にいるが、もう学校だけが「居場所」じゃないというのが浸透してきている。コロナの影響も少なからずあるかなと思う。親が子どもにかまっていられないような現状もある。子どものエネルギーが家庭の中で吸われてしまう。学校に行くべきでなくなるというご家庭もあったりしている現状。私も日々、そういう子どもたちと関わることもある。そのため、今お話いただいた先生達、また保護者の方たちの話については、とても頷ける話として伺っている。

加藤会長：そうするとこれはかなり大きな課題だということ。林さんはいかがだろうか。

林 委員：今、鎌倉市では、教育長主導のもと、学校行けない子たちの為にいろいろな取り組みをしている。いろいろな子どもたちが、自分に合った所で学べるように、学校だけではなくいわゆる学びの多様性のように、受け皿も沢山あるようにしている。鎌倉市では特例校の開校が決まっている。多様性を認めるというならば選択肢も増やさないと、そのニーズに答えられないということがあるため、特例校はその選択肢の1つであり、子どもの選択肢が増えるかなと期待している。それに付随して、各学校にもフリースペースを作ろうという案も出ている。やはり自由にというか、自分に一番合ったところが求められているのだと思う。学校を否定されてしまうと、教員としては辛い、「いつか学校にまた戻ってみよう」とか、根本にはやはり子どもたちには人と関わりたい、同世代の友達とかかわりたいという根本の気持ちがあると思う。そこに至るまで、自分がどういう風にフォローを求めていくかということが大切で、いろいろな選択肢の中で育てていけたらいいなと思う。今、青少年課の方がいろいろ出して下さった資料の中で、やはり参加しづらいとか、参加人数が少ないとか、各課でいろいろな課題が出ているが、だからこそ諦めるのではなく、成果の1つとして受け止め、参加が全くのゼロではなく誰かの為に価値のあるものだと思うので、ここは色々工夫をして続けて行く必要があると思う。

加藤会長：やはり居場所。選択肢のある居場所を色々作る必要がある。東樹さんはいかがだろうか。

東樹委員：私はふらっとカフェという団体を運営しており、市と共同でフードパントリーをやっているが、年間で約600人ぐらいの需要があたりして、どこもニーズがある。そういう意味ではやっぱり経済状況も厳しい人がるため、必要がある事だと思う。

加藤会長：なるほど。河合先生はいかがだろうか。

河合委員：不登校が増えているということで、先ほど話があったように市の教育委員会もいろいろな施策をやっていただいて、不登校特例校を作っていくというような事も計画しているし、林委員が言われたようなフリースペースを確保・充実させていこうというような施策もある。もちろん学校に来てもらうのが一番ということで、学校の方も教員は生徒が「1日休んだら電話をかけ、2日目で手紙、3日目には家庭訪問しよう」というキャンペーンをしながら登校に向けた働きかけしている。この後青少年課からお話

があると思うが、学びの多様性というところでは、フリースクールに通っている生徒にも補助金を出していただくような政策をやっていただいたりということで、居場所作りという点では、いろいろな選択肢は昔よりも増えていると、お伝えしたいなと思う。

加藤会長：フリースクールの補助金については、このあと青少年課の方から話があると思う。あとスポーツの現場ではいかがだろうか。

山里委員：すみません。少し小学校の現状も話させて頂きたいなと思う。コロナ以前から不登校が無いという時はほぼ無い状態で、コロナでまた増えたことを実感している。その頃から不登校だけではなく、学校に来ても教室に入れないとか、そういう子どもたちが増えていき、来た時にはよく来たねというふうに対応していた。もうその頃からフリースペースとかそういったものではなくて、別室を用意して、そこで指導したりだとか、そういったふうに学校はやってきたかなと思う。今度はフリースペースといったものを作っていくというところで、すごくいい政策だなと思う。正直なところ、多種多様な子がいるので、その子に応じた、ニーズに応じた指導をするためには、そこだけでは足りないとは思いますが、そういったことをきっかけを作っていくには、これから先はそういう場所は増えないと思う。とても大切なことをやっていただいているなと感じている。正直なところ、私が考えてるのは、中学校区に1つぐらい、支援できる施設、それぐらいがないとなかなか厳しいと思う。それから先生の数。今、やはり先生になりたいという人が減っている現状。子どもたちに夢を与えるような仕事なので私はとても素晴らしい仕事だと思っているが、なかなかアピールができていないので、やはり先生たちがすごく大変になっているという現状もある。そういった問題はありますが、今は昔のように必ず学校に行かなくては行けないという考え方では無くなっているところもある。やはり学校に来てもらいたいなというのは大前提ではあるが、それだけではないよというか。選択肢が増えることで子どもたちは、最終的には学校にかえるような指導が個別にできるといいなと思う。小学校のうちの早い段階からしていくと、やはり中学とか高校に繋がっていくと思うので、そういった手立てをしっかりと小学校の段階で厚く、やっていけたらいいなと思う。ずっとそれが子どもの悩みになってしまうと思うので。昨年度から鎌倉では、クラスを持たないで子どもたちのことをみてる先生がいる。そういった人を中心にチームで子ども達を育て上げられたらいいなと思う。

加藤会長：若木委員、スポーツの方だと何か変化等はあったらどうか。

若木委員：この一覧表の1-6や3-5にもある、海を題材にしたイベントやっている。それに参加した子ども達が世界大会に出ている。そういう事があるため、いろいろなものを提供していくことが必要なのかなと思う。この資料には無いが、小中学生を対象にした市ジュニア栄誉表彰を毎年1月に行っている。表彰をしていくことは励みになると思う。もう1つは、学校スポーツから、地域のいろんな企業体の方面へ行かれる方もいるので、なかなかその辺の今までのスポーツの有様やいろいろなことを考え直していく時期なんだなという事は思う。

加藤会長：ありがとうございました。続けて課題2「子ども若者育成プランの中間見直し」についてということで事務局よろしくをお願いします。

～子ども若者育成プラン中間見直しについて 説明～

加藤会長：子ども・若者育成プランの30ページにある重点事業の青少年の居場所作り。これは確かに先ほどお話あったように、学校の中でも地域の中でも、作っていく必要があるということ。それから、地域の担い手となる青少年の育成。この2点が大きな課題として挙がってきてる。31ページから具体的な中身について記されているが、この辺でご意見ありましたら、先ほどのことも含めて、いかがだろうか。

下山委員：地域の担い手となる青少年の育成ところ。私が携わってるのはそこかなと思う。色々なイベントを手伝っている。例えばお祭り。子ども達を育成するという点で、青少年指導員云々と書いてあるが、やはり

伝承をしていかないと、地域は繋がっていかないと。例えば、笛を教えて子どもが集まる、太鼓を教えて子ども達が集まる、そこから、またお祭り楽しい、では次、担い手としてこれを繋げていこう、というところが出てくる。それがあったのは、成人のつどいのアンケートでお祭りをやりたいといったことが書いてあったと思う。伝承を捨てることは無いかなと。確かに新しい方法というのはある。篠笛や太鼓なんかも Zoom でやったりする。中学生くらいになるとみんなが得意になっているので。ただ、対面で行った今年は全然違う。子どもの表情が。Zoom でやっていたときは言葉が出ないので、言語能力がすごい劣っているなと思った。子どもキャンプをやった時も思ったが、やはり対面でやっていくうちに、言葉もたくさん出る、お友達も増えるということで、やっぱり伝承事業というのは、ここの担い手としては大事なところではないかと思う。細かいところで中高生参加というのは、市の方はどういう方法で参加させようと考えているのか、お伺いしたいなと思う。中高生は長期休みの時などではないと難しい。どのように中高生のやりたいという気持ちをかき立てさせるように持っていくのか、その辺を、教えていただきたい。

小林課長：ご承知の通り放課後かまくらっ子は小学生児童の放課後の居場所の安全な提供というのが第一の目的。ただ単に学校の児童が安全に過ごせる場所の提供だけではなくて、地域との繋がりや、周りにいらっしゃる方々の繋がりを大事にしているというのが基本理念であります。その一つとして、中学生、高校生が放課後かまくらっ子の事業に参画してくれる事で、斜めの関係、小学生から年の近いお兄ちゃん・お姉ちゃんが、普段いる支援員との関係とは別の関係を結ぶことで、児童にとっても、すごくそこに行きたいという楽しいという気持ちも芽生えるし、参画してくれた中学生・高校生にとっても、自分が頼りにされたり、自分が役に立っているといった気持ちを持ってくれるといいな、という思いを持っている。中学生・高校生の多くは非常に忙しくて、放課後なかなか時間が取れない。そのため、中学生や高校生が関わる時は、個人として関わる場合もあると思うがグループや委員会の活動でとか、部活動の関わり合いであるとか、そういったところが、人数としては大きくなるのかなというふうに感じている。ただ一方、中学生になったけれども、小学校時代によく知っている、放課後かまくらっ子のスタッフのもとを訪ねてきてくれる卒業生がいるということもある。中学校で、嫌なことがあったとき、何もなくてもフラッと思い出した時に来てくれる、それこそ選択肢のひとつになるといいなということで、個人として関わる中学生の数は少ないが、放課後かまくらっ子を卒業した際に登録をしていただければ、小学校卒業後も中学生・高校生になったときに、フラッと立ち寄れるとして、そこで本来の自分を取り戻すきっかけになったり、前向きな気持ちになってくるというところを目指して行きたい。

加藤会長：はい、ありがとうございます。そこに書いてあるね、31 ページの地域の担い手となる青少年の育成の(2)に放課後かまくらっ子への中高生参画とあり、放課後かまくらっ子に中学生サポーターを少し入れてみたらどうか、というかまくらっ子を卒業して中学から高校に行った子たちが、また戻ってくるということも含め、中高生が中心になってやるプログラムなんかも作っていこうと、てらこやや鎌倉女子大学の大学生が少しずつ加わってくれるような動きが出てきたので、中高生もこれに参加することによって、また違った、何かが生まれてくる可能性もこれからあるかもしれないということで、大事にしてこうということである。他にはいかがだろうか。

林 委員：今の考えはとてもいいなと思うが、それプラス、中高の部活とかボランティアで時間を作って、その様なオファーみたいなものをされてもいいのではないかな。

小林課長：放課後かまくらっ子には各施設にコーディネーターという職を置いていて、コーディネーターが学校に出向くというところもある。また、ボランティア部などと青少年課が会議等でお会いした場合は声がけをさせて頂いている。

河合委員：本校も卓球部がやっている。

加藤会長：つながりが段々と始まってきている。

下山委員：教育委員会の方からももっと周知してほしい。

田中委員：高校の方でもコロナでずっとボランティアがなかなかできなかったのだが、小学校のこの部分については、去年もやっているし、今年もやる方向で進めている。また、地域の清掃活動が再開されますので、出席の予定でいる。

加藤会長：町の清掃活動が始まってくると、地域全体が変わる。そこに子どもたちが入ってくるとなると凄いこと。学校の中も段々と雰囲気が変わってきて、学校の中にも居場所を作っていこうだとか、フリースペースを作ろうという話もある。地域の中でも行ける場所を段々と膨らまして作っていこうという流れが出てきている。それでは、課題3の今年度のスケジュールと報告事項についてということで青少年課から説明をお願いしたい。

～子ども・子育てきらきらプランとの一体化について説明～

加藤会長：実はこの会議で話されている問題は鎌倉市だけではない。子どもの数が減ってきていることは国全体の問題そして学校は、先生方の成り手が少ないという大変厳しい状況の中で、子どもたちの対策を立てるということで、鎌倉市の子ども計画というのを、これから鎌倉市に作ろうということ。子どもの基本的なものを守っていくための、育てていくための、基本付けの貧困対策と青少年育成という大きな課題が重なって出てきている。これに対する計画をこれから作ろうということで、これからの議論が始まるわけで、具体的にどんなことを青少年問題協議会として提案していくかということをして次回以降、本格的に始まると思う。なにかこんな計画を作り上げたいとか意見はあるだろうか。なければ、次の報告をお願いします。

～フリースクールについて説明～

加藤会長：フリースクールに通うのも経済的にもなかなか大変。そのため、鎌倉市は居場所の選択肢であるフリースクールに通っている児童に対し、補助金を出そうということを検討しているということで、利用料の3分の1ぐらいの額で、1万円を上限にするとのこと。ここで議論した内容を受けて、青少年課の方で提案をいただいて、議会にも出していただくということで、進んでいるところ。これが決定すると、また鎌倉の中で大きな動きになっていくし、中身が膨らんでくる可能性もあると思う。こういう形で一つずつ進んできた。

言い忘れた事などはないだろうか。今回の委員は、7月末までの任期になっているため、次回は新委員での会議になる。最後に市民委員のお二人から一言コメントを頂きたい。幅さんからよろしいだろうか。

～幅委員・川島委員 あいさつ～

加藤会長：今回の会議も貴重な意見がいただけた。

言い残したことがなければ、本日の令和5年度第1回目青少年問題協議会はこれにて終了する。

以上